

解決志向の道徳授業の開発

—問題志向から解決志向への転換—

Development of Solution-Oriented Moral Lesson

—Conversion from Problem-based to Solution-Oriented—

柳沼良太

YAGINUMA Ryota

[キーワード Keyword] 解決志向、問題解決学習、道徳授業、認知行動療法、短期療法

[所属 Institution] 岐阜大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Gifu University)

[要旨 Abstract]

本稿では、問題解決的な学習を取り入れた道徳授業として、「解決志向の道徳授業(Solution-Oriented Moral lesson)」を構想し、その理論構成を解説すると共に、具体的な実践を例示する。「解決志向の道徳授業」とは、教材に示された道徳的問題の発見やその原因分析を偏重するのではなく、問題に取り組む登場人物の立場で、未来をよりよくするための解決像を構築し、具体的な方法について考え判断し、協働して納得解を創り上げることを重視する。特に、認知行動療法を活用した問題解決法の5段階（①問題を定義する、②目標を設定する、③解決策を創出する、④意思を決定する、⑤解決策を実行し評価する）をふまえ、現状の問題を冷静に見据えつつ肯定的な解決に向けて考え議論する道徳授業を構想する。また、短期療法を活用した解決志向の道徳授業では、子どもたちのリソースやストレンクスを活用し、ミラクル・クエスチョンやスモール・ステップ等を用いて前向きな態度を養い、道徳的行為や習慣を促すことができる。こうした道徳授業は、子どもたちの未来の可能性をポジティブに捉え直すと共に、現実の生活経験においても生きて働く道徳性を育成することに繋がるだろう。

はじめに

これまで道徳科において様々なタイプの「問題解決的な学習」が開発・実践されてきた⁽¹⁾。ただし、道徳科における「問題解決的な学習」の定義が曖昧であるため、実際の道徳授業では混乱したり失敗したりすることもある。こうした問題解決的な学習を取り入れた道徳授業がうまく展開できない例の一つとしては、授業の展開部において教材に提示された道徳的問題の原因を分析することに集中しすぎて、肝心の問題解決に辿り着けないことが挙げられる。こうした道徳授業は、「問題解決的な学習」と称しながらも、「問題発見的な学習」あるいは「問題分析的な学習」になっており、互いに納得できる解決策に至らないケースが多い。こうした道徳的問題を単に発見・分析するだけの授業では、その具体的な解決には至らないため、子どもたちの日常生活における行動や習慣に生かされることはなく、実効性や汎用性に乏しいものとなる。

こうした課題に関して、心理療法やカウンセリングの分野では、問題志向的アプローチではなく、解決志向的アプローチを用いることが多くなっている⁽²⁾。長時間かかるわりに効果の乏しい問題志向のカウンセリング（例えば、精神分析や来談者中心療法）ではなく、短期間で効果的な解決志向のカウンセリング（認知行動療法や短期療法）が求められている。道徳授業でもこうした問題志向から解決志向へと質的転換を図ることが有意義であると考えられる。筆者は既に論理療法を用いた道徳授業の改善案を提示しているが⁽³⁾、本稿ではさらに解決志向に重点をおいて認知行動療法や短期療法を用いた道徳授業の構築を目指したい。

以上のような趣旨から、本稿では、問題解決的な学習を取り入れた道徳授業の中でも、特に「解決志向の道徳授業(Solution-Oriented Moral lesson)」を構想し、子どもたちが問題の解決を志向して学習する道徳授業の理論と実践を具体的に明示することを目的とする。そこでは、認知行動療法や短期療法の発想を生かして、教材に示された道徳的問題の原因分析にばかり重点をおかず、問題に取り組む登場人物（関係者）のリソースを見出し、未来をよりよくするための解決像を構築し、具体的な方法について考え議論する。また、

道徳の教材をもとにして、子どもに過去を反省(懺悔)させるのではなく、子どもたちが「将来こうになりたい」という夢や希望をもち、「そのためにはこうしたい」と言う見通し(展望)を立てることに重点を置く。そして、未来のビジョン(理想とする姿)から現在の自分を振り返り、いかに生きるべきかを具体的かつ肯定的に考えられるようにするのである。

解決志向の道徳授業を構想するために、本稿では1節で、解決志向の道徳授業を提案する理由として、「問題志向の道徳授業」と比較しながら検討する。2節では、道徳科における「問題」と「解決」の関係性について認知心理学の見地から考察する。3節では、認知行動療法を活用した問題解決法の5段階を道徳科と関連付けて再構成する。4節では、短期療法を活用した解決志向の道徳授業を構想する。このように解決志向の道徳授業の理論とその具体的な指導法を開発して展開例と共に提示していくことにしたい。

1 節 問題志向の道徳授業と解決志向の道徳授業

道徳授業が「特別の教科」となり、従来の「読み取る道徳」から「考え議論する道徳」へと質的転換が図られる中で、多種多様な「問題解決的な学習」が開発・実践されてきた。そうした道徳科における問題解決的な学習は、大別して「問題」の発見や分析に焦点を当てる問題志向の道徳授業と、問題の具体的な「解決」に焦点を当てる解決志向の道徳授業がある。

(1) 問題志向の道徳授業

前者の問題志向(Problem-Oriented)の道徳授業は、問題を発見したり、問題の原因を分析したりすることに重点を置く。このように道徳的な問題の発見やその分析に注力するため、「問題発見的な学習」や「問題分析的な学習」と呼ばれることもある。そこでは、物語の中に道徳的な問題を見つけ出し、それがなぜ生じたのか、どのようにして生じたのかを分析したり推測したりすることに注目する。

こうした授業で用いられる発問は、例えば「ここで何が問題になっているか」「どうしてこのような問題が生じたのか」「何が原因でこうなったか」等である。道徳的な問題の所在をまず把握して、それが発生した原因に関心を寄せ、その発生した原因を問いかける中で道徳的問題の本質を捉えようとするものである。

また、子どもたちが教材に提示された問題を「自分事」として考えられるように、子どもたち自身に「同じような道徳的問題がなかったか」、「その原因は何だったか」を問うこともある。こうして子どもに道徳的問題に関心をもち、その原因を追及することに傾注するのである。

こうした問題志向の道徳授業では、過去の登場人物の言動を共感的に理解したり批判したりしながら、道徳的問題を特定し、その問題の原因を追及することに話し合いが集中する。ここでは問題の原因さえ分かれば、その解決も自ずと分かってくると見なされている。それゆえ、子どもたちは道徳授業で問題の原因は理解できても、その解決法は分からないため、実際の生活経験に結びつけられず、実効性は低いままになる。

このように問題志向の道徳授業では、ひたすら過去の原因分析や責任者の特定や責任追及をする展開になりがちで、肝心の具体的な行動を伴う解決策を話し合う時間が少なくなってしまうところに特徴がある。

(2) 解決志向の道徳授業

それに対して、後者の解決志向(Solution-Oriented)の道徳授業では、教材に提示された問題について把握はするが、過去に生じた出来事の原因を深く分析・追及しようとはせず、その解決に焦点を当て、具体的に将来どうすべきかを考える。このように解決志向の道徳授業では、「問題の原因」と「その解決」を切り離して捉え、問題の原因には深く関わらず、将来においてどのように解決したいのか、どうすれば解決できるのかにしっかり焦点を当てるのである。

解決志向の道徳授業では、道徳的問題を悪いもの(困ったもの、排除すべきもの)として見なすのではなく、よりよい生き方を考える上で貴重な機会を提供してくれるものとして捉え直す。教育原理的に見ると、子どもは問題(発達課題)を解決する経験を通して成長することができる。そう考えると、子どもが取り組む道徳的問題とは、決して忌み嫌われる「悪いもの」「ない方がよいもの」ではなく、子どもがよりよい生き方をするために「貴重な機会(チャンス)を与えるもの」なのである。

こうした解決志向の発想は、もともと心理療法、カウンセリングなどで活用され、学校教育においても生徒指導、教育相談、学級経営など多様な分野で活用されている。解決志向アプローチは各種の心理療法の中でも、特に認知行動療法や短期療法（ブリーフセラピー）において開発され実践されている。

2節 道徳科における問題と解決

(1) 問題と解決

次に、道徳科において問題や解決とは何を意味するかについて認知心理学の見地から検討することにした。人間は人生において様々な問題に向き合い、それを解決しながら成長していく。ここでいう問題とは、「人間」と「環境・状況」との相互作用の中で生じてくるものである。人間は、環境や状況から様々な刺激を受け、それに様々な反応（認知、感情、身体、行動の変化）を起こす。ここで個々人がどのような問題状況に対して、どのような反応が起こすかによって、その人の性格や人格特性が形成される。また、ある人が問題を繰り返してしまう場合、その思考パターンを理解することで、その悪循環を断ち切るような新たな考え方（認知）や対処方法（行動）を考えることができるようになる。

このように問題解決とは、現在の環境や状況とうまく適応できない場合に、その認知や行動を変えることで改善していくことである。そのように考えると、問題解決とは、毎日の生活の中で直面する問題場面を処理するために効果的な手段を探し出すことであると言える。日常生活で問題に直面した際に、人間はどのように考え行動しているか。問題解決のプロセスは、一般的に以下の5つの段階で現わされる。

第1段階は、問題を定義する。「何が問題か」「何に困っているか」を明らかにする。第2段階は、目標を設定する。問題を解決することによって「何を達成するか」「どのような状態に辿り着きたいのか」というゴール（目標）を定める。第3段階は、解決策を創り出す。「どのような解決策が考えられるか」についていろいろアイデアを出し合う。第4段階は、解決策を絞り込んで意思決定する。ここで具体的に「何をするか」を選択する。第5段階は、解決策を実行し、その効果を評価する。自ら考えた解決策を実際に行ってみて、その結果を評価し検証し、フィードバックする。このように問題解決法では、問題解決における5つの段階を経て、自分自身の思考プロセスを省察することになる。

(2) 問題とは何か

まず、そもそも問題(problem)とは何かについて検討しておきたい。認知心理学的に捉えると、問題とは、「したいこと」や「すべきこと」と現実とのギャップとして生じたものである。その問題はまだ有効な解決策を取ることでできない状態にある。こうした問題が小さければたいしたことはないが、大きくて圧倒されてしまうと、自分の力ではどうすることもできないと思われ、心理的苦痛となりストレスを感じるようになる。

それでは、なぜ人間は問題に直面すると苦痛を感じるのか。「したいこと」や「すべきこと」と現実との間にそれほどズレがなくて、自分が環境と適応した状態であれば苦痛を感じることはない。それに対して、困難な問題状況が生じたことによって、「したいこと」「すべきこと」と「現実」の間に大きなギャップが生じると、不快になり苦痛を感じるようになる。

この問題の定義の中の「したいこと」と「すべきこと」の違いも確認しておこう。「したいこと」は、本人内部から生じる個人的な願望や目標であるのに対して、「すべきこと」は、その個人の環境側から生じる要求である。

こうした問題には、個人的な問題から社会的な問題までいろいろある。個人的な道徳的問題であれば、節度ある生活をしたが不摂生な生活になるという問題、一生懸命勉強すべきだが怠惰になるという問題がある。社会に関する道徳的問題とは、個人レベルを超えたもので、例えば、格差社会における貧困問題とか環境問題、情報モラルの問題などがある。こうした社会的問題の場合、「誰にとって問題か」と「どこまでの範囲で問題か」という二つの視点で問題点を明らかにすることが大事になる。

(3) 解決とは何か

上述したように、問題とは「したいこと」「すべきこと」と現実とのギャップであり、有効な解決策をとることができない状態であった。この中のギャップを埋めるために、具体的で効果的な行動を伴って、問題に対する目標を達成するものが解決策である。こうした解決策は、それを行うことで、問題に対してポジティブな効果をもたらすものでなければならない。

ただし、現実的に考えると、解決策を実行するためにはそれなりの労力や望ましくない損失のようなネガティブな結果が生じることもある。そこで、解決策を実行することで、あらかじめ予想されるポジティブな結果とネガティブな結果を見計らって、ポジティブな結果を最大にし、ネガティブな結果を最小とするような解決策を複数の解決策の選択肢から選んでいく必要がある。そうするためには、できるかぎりたくさんの方の解決策を考えておき、自分の問題解決に最適な解決策を選べるようにしておくことが大事になる。

第3節 問題解決法の5段階

前節で示したように、問題とは、願望「したいこと」「すべきこと」と現実「であること」とのギャップから生じており、解決とはそのギャップを埋めることである。人間は日常的にこうした問題を解決しながら生活しているが、そのプロセスは無意識的に行っている。この問題解決のプロセスを構造化して意識的に捉え、第三者の視点から問題解決をコントロールしようとする試みが、認知療法という問題解決法である。

問題解決法では、前節で述べたように、①問題を定義する、②目標を設定する、③解決策を創出する、④意思を決定する、⑤解決策を実行し評価する、という5段階を一般的に用いる⁽⁴⁾。こうした5つの段階に基づく問題解決法は、教育の分野だけでなくコンサルティングやカウンセリングの分野でも使われており、実効性あり汎用性も広いことが知られている。

ただし、一回の道徳授業でこの5段階すべてを行う必要はない。授業では、①問題を定義する、②目標を設定する、③解決策を創出する、④意思を決定するの段階まで行って終了することもある。その後、⑤「実行と評価」を別の日程で行うということもある。②の「目標を設定する」を行っているうちに、問題の本質が見えてきて、①の問題の定義を練り直すこともある。③や④で解決策を検討する中で新たな問題が見つかり、①や②を練り直すこともある。

以下では、道徳科における問題解決の5段階を詳しく検討してみたい。

第1段階 問題を定義する

まず、問題を定義していく。問題を捉えるためには、望ましい状態「したいこと」「すべきこと」と現在の状態「であること」とに分けて、そのギャップを問題として明確化することが有効である。この「望ましい状態」には、「したいこと」と「すべきこと」の両方がある場合もあるし、片方しかない場合もある。

例えば、日常生活が乱れていて学習に身が入らないという問題があるとする。この場合、生活の乱れや睡眠不足という現在の状態に対して、「節度のある健康な生活をしたい」「真面目に学習しなければならない」という望ましい状態とのギャップを明確にし、それを問題として捉えることができる。

問題解決法では、この問題の定義が意外に難しい。問題の定義に深入りしてしまうと、抜け出せなくなるため、暫定的に仮置き定義をしておき、次の段階に進んだ方がよいこともある。どれほど大きな問題でも砕いて小さな問題とすることで取り扱いやすくなり、問題の定義を具体化できる場合もある。ただし、すべての問題を意識化して、言語化することはできないので、思いつく範囲で問題を取り上げる。

次に、問題の明確化をする。願望「したいこと」「すべきこと」と現実「であること」のギャップを明らかにしていく作業を通して、徐々に「今、自分が大切にしているもの」や価値観が明確になり、取り扱うべき問題が見えてくる。それと同時に、取り扱わなくてもいい問題も明らかになっていく。

「なぜ私はこの問題に苦しんでいるのだろう」「自分はどうしたいのだろう」「自分はどうすべきだと思っているのだろう」と自問自答してみることで、問題の背後にある自分の「したいこと」「すべきこと」に気づいていく。

第2段階 目標を設定する

目標を設定する段階では、第一の「問題を定義する」段階で明らかにしたギャップを埋めるという方向に向けて、どこまで何を行うか範囲や期限を明確にした目標を設定する。

まずは、第一段階で明確にした望ましい状態「したいこと」に基づき、具体的に「どのような状態になりたいのか」「どのような状態を手に入れたいのか」を言語化し、図式化していく。これは自分自身が目指す身近な将来を明確にすることであり、自分自身に関する将来のビジョンを作り出すことである。

ここでは、第1段階で明らかになった「自分の大切にしているもの」や価値観を考慮しながら、自分が望んでいる状態「何がしたいのか」を想像して、ビジョンを作る。

このビジョンを目標として設定する時に、「なぜそうしたいのか」と自問自答してみるのもよい。例えば、「もっとがんばって勉強する」という場合、「なぜそんなに勉強するの?」と自分に尋ねてみる。すると、「成績を上げるため」と答える。「なぜ成績を上げたいの?」とまた聞くと、「いろんなことを知りたいから」「将来、やりたい仕事に活かしたいから」「人から認めてもらいたいから」など自分の価値観の反映された目標が見えてくる。

ビジョンは、ここで設定する目標がどのような状態なのかをイメージできるように具体化する必要がある。つまり、自分自身に関するビジョンを作るとは、最終的に自分自身がどうなっているのがよいか、すなわち「状態目標」を明確に具体化する作業である。もし目標を十分にイメージできない場合は、第1段階の「問題を定義する」に戻って、何が問題だったかを考え直すこともできる。

第3段階 解決策を創出する

第2段階で暫定的なビジョンに基づく状態目標を設定したら、次の第3段階では、願望と現実のギャップを埋めるための具体的な解決策を行動レベルで考えることになる。つまり、状態目標を実現するための具体的な行動プランを考えていくのである。

解決策を創り出す際も、過去の経験が大きく影響している。今までに自らが経験したこと、周りから得た情報によって、人は無意識に頭の中で「この方法はできる」「この方法はできない」とすぐ判断してしまう。これまでの経験や知識に合致しない方法が浮かぶと、無意識に「それは無理だ」と早々に却下してしまう可能性がある。このように自分の思考の枠組みで考えていると、解決策があまり思い浮かばず、これまでと代り映えしない方法だけになってしまう。

そうならないようにするためには、問題解決において自分の思考の枠に囚われず、自由に思考を拡散させるブレイン・ストーミングを行うとよい。「頭の中に嵐を起こす」という意味のブレイン・ストーミングを行うことで、グループで豊かな発想で自由にアイデアを出し合うことができる。ここでのルールは、①解決策に判断や結論を出さない、②自由闊達に考える、③量をたくさん出す、④アイデアを結合したり発展させたりする、である。

道徳授業だと、「場所が分からず困っている人がいる」という問題状況に対して、単に「親切にした方がいい」という解決策を述べて終えることが多いが、そうした状況目標を提案するだけだと、実際にそれができるかどうかという可能性（実行可能性）が低くなることになる。そこで例えば、「声をかけてみる」「道を教えてあげる」などの具体的な行動を考えることで、解決策の選択肢を多様に増やすことができる。

このブレイン・ストーミングは、小集団（四人グループ）で行うことが望ましい。効果的な解決策は、自分自身のいつもの考えから選ぶだけでなく、多くの多様な人たちがアイデアを出し合い、できるだけ解決策のレパートリーを広げるようにする。

ここで注意すべきなのは、「～する」という自分自身を主語にした行動プランを解決策として示すことである。「～すればいい」という他人を主語とした行動プランだと主体的に取り組まず、身が入らないからである。こうした解決策は、具体的な行動の目標なので「行動目標」と呼ぶ。

第4段階 意思を決定する

第4段階では、いろいろ考えた多様な解決策のうち、実際に実行するものを選択し、それを具体的な行動

プランに落とし込んでいく。最適な解決策を実行するためには、できるかぎり合理的な意思決定を行っていく必要がある。

ここで様々な偏見（バイアス）から影響を受けることになる。代表的なバイアスとして、①利用可能性バイアス、②現在バイアス、③損失回避性がある。①利用可能性バイアスとは、過去の成功体験に引っ張られて、現在もそのやり方を取ろうとするものである。②現在バイアスとは、先延ばしにしようとするものである。面倒なことや心理的負担の大きいものは、できるだけ先延ばしにしようとして、結局、何も実行できずに終わることになる。③損失回避性とは、解決策を行うことで得られるメリットよりもデメリットの方を大きく見積もって、デメリットを回避しようとして合理的な判断をできなくしてしまうことである。

この意思決定の段階では、多様な解決策の中から有力な考えをいくつか取り上げ、次に比較検討を行う。問題解決の意思決定においては、解決策を行うことで得られるメリットと、解決策を行う際の労力や危険性というデメリットを考える。それぞれメリットとデメリットを書き出し、それぞれの項目について、今の自分にとってどれくらい重要であるかを検討する。上述したように③「損失回避性」があるので、冷静に価値判断して、合理的な判断ができるようにする。こうした中で、自分が何に価値をおいているのかに気づき、自分の本当の理想や願望を明確にすることができる。

さまざまな解決策の中で望ましい解決策を選ぶことができれば、具体的にどのように行動するかを検討する。そのためには、行動プランの策定の段階で「SMART目標」⁽⁵⁾の観点で最終的な点検をするようにする。

こうした解決策は、机上の空論とせず、実際の実行可能性を高めるためにも、できるだけSMARTな行動プランになるように構想する。つまり、①具体的(Specific)な解決策にする、②計測可能(Measurable)な解決策にする、③達成可能(Attainable)な解決策にする、④問題解決の貢献に関連した(Related)解決策にする、⑤期限のある(Time-limited)解決策にする。

第3段階の解決策の創出と第4段階の意思決定を一緒に行ってしまうと、いつも用いている一般的な方法を選んでしまうことになりがちである。それゆえ、第3段階の解決策の創出と第4段階の意思決定は、必ず分けて行う必要がある。

第5段階 解決策を実行し効果を評価する

問題の解決策として具体的な行動プランを立てた後は、それを実行して、その効果を確認することが大事になる。通常の解決志向では、1週間くらいの期限を設定し、その間に解決策を実行してみる。やると決めた行動は、設定した期限まで続けて行うことである。計画していた解決策は、実際に行ってみて初めて適切であったか（実行したら解決できたか）、不適切であったか（実行しても解決できなかったか）を評価することができる。

ただし、期限に達した後で、解決策を実行しても望ましい結果が出なかったり、満足できなかったりした場合は、解決策としての行動計画を抜本的に変えてもよいし、途中で止めてもよいことにする。道徳的な解決策では、すぐに結果が出ないこともあるため、期間を延長して中長期的に様子を見ることもできる。このように行動プランの変更や中止を臨機応変に認めることで、実際に道徳的行動することへの抵抗をなくすることができる。

解決策の実行後には、その結果どうなったかについての省察を必ず行う。何を、いつ、どこで、誰と行ったかを記録する。その際、目標をどのくらい達成できたのかを得点化（スケーリング）しておくこともできる。また、問題解決においては、事前に目標としていなかった成果が生じることもある。その場合、解決策に取り組んだことによって生じた「良い影響」と「悪い影響」を別に記録しておくこと次に繋がる。

第4節 短期療法を活用した解決志向の道徳授業

次に、短期療法を用いて上述した解決志向の道徳授業の改良・改善を試みたい。短期療法（ブリーフセラピー）は、ミルトン・エリクソン(Milton H. Erickson)の心理療法を端緒とするが、後に多様な展開を遂げ、日本でも心理療法現場だけでなく学校全体の教育活動に導入されている⁽⁶⁾。本節では、この短期療法を用い

て解決志向の道徳授業の再構成を図りたい。

短期療法での基本的発想は、まず、解決について知ることの方が、問題や原因を理解することより有用であると考えられることである。次に、問題に取り組む子ども自身が解決のためのリソース（資源・資質）を持っていると認めることである。こうした発想で、教師があらかじめ用意した答えを子どもに教えようとするのではなく、子ども自身が問題を解決のためのリソースをもっており、それを教師が引き出そうとすることが大事になる。

従来の道徳授業では、子どもは本来、変わらない存在だから、現在の至らない子どもに欠如・不足している道徳的価値を教え込もうとする。このように教師が「子どもは変わらない」という否定的な信念をもてば、当の子どもは変わらなくなる。それに対して、短期療法では、子ども自身にリソースがあると考え、子どもは変わり得る存在であると考え。このように「子どもは変わる」「子どもはよくなる」「子どもはよりよく成長する」という前提で問題解決に関わっていくため、実際に子どもの変容（トランスフォーメーション）や成長を促していくことができるのである。

もちろん、毎回の道徳授業で子どもが飛躍的に変容することを求める必要はない。道徳授業で子どもの中に、たとえ小さな変化でも起きれば、それはいずれ大きな変化を生み出すことにもなりうる。解決志向の道徳授業では、問題の解決にあたって、子どもの可能性があるところ、子どもが少しでも変わりうる場所に焦点を当てる。少しでも変わるところがあれば、そこに焦点をあてることで、そこがますます拡張されていき、うまくいくことを繰り返せるようになり、それが大きな変化につながっていく。そうした成功を積み重ねて、ポジティブな成功体験を増やしていくことが、子どもの確かな道徳的な成長になる。以下に、短期療法の発想を参考に、解決志向の道徳授業の方針を構想し直していきたい。

（１）解決像を思い描く

短期療法では、過去に起きた問題の原因を分析したり追求したりすることには執着せず、将来に目を向けて「どうなってほしいか」「どうなりたいか」「どうすればよいか」に徹底して焦点を当てる。そこで、解決志向の道徳授業でも、将来に目を向け、望ましい解決像を思い描くようにすることが大事になる。ここで大事なのは、すぐに問題を解決するための方法論に入るのではなく、どのような解決像を望むのかについて大局的に構想することである。そういう将来のポジティブなイメージを十分に膨らませて、そのイメージを共有することができれば、その実現を目指した方法論を考えることができるようになる。

例えば、①内容項目Aの「主として自分自身に関すること」として、練習を怠けて試合で無様に大敗してしまうという問題があったとする。ここで望む将来の解決像としては、より優れた資質・能力をもって大会に出場して試合で活躍することになるかもしれない。そのためには、弱点を克服し長所を伸ばすために綿密に計画を立てて、それに対応した練習に熱心に取り組むことになるかもしれない。試合前にこうした練習を十分にすることができれば、自分も安心するし、チームメイトからも信頼されるし、監督や保護者からも応援されるようになるだろう。

②内容項目Bの「主として他者との関わりに関すること」としては、友達と言葉のすれ違いによって仲違いしてしまったという問題があったとする。ここで望む解決像は、再び信頼しあえる友人関係になることになるかもしれない。そのために、お互いに腹を割って率直に話をして、互いに納得いくまで話し合い、誤解や曲解など認識のズレをなくし、分からないところは説明を補い、互いに信頼し合える関係を築き直すことで、楽しい交流を続けることもできるようになるだろう。

③内容項目Cの「主として集団や社会との関わりに関すること」としては、学級内で弱い者いじめがあるという問題があったとする。ここで望む解決像は、お互いに尊重し合える学級、心身の安心・安全な学級にすることもかもしれない。それをふまえて、お互いに尊重し合い、安心・安全な学級を築くためにはどうすればよいか新たな課題となる。そもそも「いじめ」とは何かを理解し、いじめとふざけ（いじり、遊び）の違いを考え、それをなくすためにどうしたらよいかを考え、相手の立場になって考えること、互いに相手を傷つける言動をしないこと、思いやりのある言葉をかけ合えるようにすることなどが提案されるかもしれない。

このように子どもたちが自分たちを理解すると共に、自己がめざす未来を思い描いて、そこから今の自分

を逆に規定していくのである。例えば、「このような人間になりたい」「将来の自分ならこうしているだろう」と想像して、それを実現するために具体的な行動を考える。そして、その道徳的な行動を通して問題を解決することができたら、自分にふさわしい未来に近づいていることを実感することができる。それに対して、道徳的な行動ができず失敗したら、「自分らしくない」と考えて修正していくこともできる。

ここでは過去や現在の自己像をネガティブに捉えるのではなく、将来の自己像をポジティブに思い描くようにすることが大事である。そこで、「将来、自分はどのようになっているか」「どうありたいのか」と自由に想像し、それに向けて努力する。例えば、「将来、人間関係をよりよく築きたい」という目標を立てたとする。それであれば、人間関係をよくするために、自制力、親切、思いやり、感謝、協働などが必要となる。そうした道徳的諸価値を身につけた自分の目指す夢や目標を、よりリアルで鮮やかに思い描くことができれば、それだけ実現可能性が高まることになる。

(2) リソースやストレングスを探す

短期療法では、問題が生じた原因や当事者の欠点に目を向けるのではなく、当事者がもっている内的・外的なリソース（資源・資質）やストレングス（個人の強み・能力）を探すようにする。そこで、解決志向の道徳授業でも、登場人物の欠点や短所に目を向けるのではなく、その人の長所や得意とするところに目を向けるようにする。

例えば、バスの中で体の不自由な方に席を譲るかどうかの葛藤があったとする。原因志向の道徳授業では、席を譲ろうとしない心理的葛藤や問題の原因を探して、主人公の性格や人間性を否定的に捉えがちである。それに対して、解決志向の道徳授業では、相手に席を譲ろうとする「思いやり・親切」や「公德心」があることを認め、相手に言葉をかけて席をゆずる行動に出る勇気があることも肯定的に捉える。「思いやり・親切」の気持ちをもって「席を譲ろう」とする内的リソースとしてもっていること、実際に「こちらの席をどうぞ」と相手に声をかけて立ち上がり行動する能力があることを積極的に評価するのである。葛藤場面で、「席を譲りたくない」「自分も座りたい」という否定的な側面にばかり焦点を当てるのではなく、「席を譲ってあげたい」「人のために行動したい」という肯定的な側面があることも積極的に認め、その道徳的態度を認め励まし勇気づけるのである。

(3) 例外に注目する

短期療法では、問題ばかりに注目して解決できないと思うのではなく、例外的にうまくいっている状況に注目する。ここでいう例外とは、「すでに起こっている解決の一部、あるいは例外的に存在している解決の状態」のことである。問題がある状況では、すべてがよくないと思いがちであるが、実際はそうではなく、うまくいっていない所もあれば、うまくいっている所もある。そこで、うまくいっている所に視線を移せるように、「問題のある時でも、例外的にうまくいっている時はありませんか」と子どもたちに問いかける。

そこで、解決志向の道徳授業でも、問題にかかわる例外に注目する。例えば、家であまり勉強をしない子がいるとする。この場合、その子が家で例外的に勉強している時はないかを探してみる。すると、その子は昆虫のことならとても熱心に何時間でも学び続けているとする。それなら、昆虫のことをもっと詳しく調べるような分野で勉強をし、そうした資質・能力を伸ばしていけばよいことになる。

別の例で言うと、いつも友達と喧嘩ばかりして乱暴な子がいたとする。その子が、例外的に友達と仲良くしている場面を探してみる。すると、例外的に友達と野球やサッカーをしている時は、仲良くできているとする。それなら、その子はいつも喧嘩ばかりする悪い子ではなく、皆と仲良く協力し合いプレーすることもできる子が分かる。本人も友達と喧嘩ばかりするよりも、仲良く協力した方が楽しくプレーすることができることを自覚する。こうした例外的なところ（問題が解消していること）に注目して、積極的にその理由を考えることができれば、その例外を繰り返したり拡大したりすることで、道徳的問題の解決のための重要な糸口になる。

(4) 問題の外在化

短期療法では、問題を当事者に内在化させ批判するのではなく、問題を外在化して、本人の外に出して考える。こうした「問題の外在化」は、問題を本人や関係者から切り離して、外部に取り出し、ニックネームを付け、それを擬人化して扱うことにより、本人およびその関係者が、その問題への対処法を発見できるように援助することになる。

解決志向の道徳授業でも、こうした外在化を用いることで子どもたちは自らの道徳的課題に前向きに向き合うことができる。例えば、ある子どもにとって怠けることが問題であるなら、心の中に「怠け虫」がいると考える。怒りっぽいことが問題なら、心の中に「イライラ虫」がいると考える。こうした「怠け虫」や「イライラ虫」が本人を困らせていると考え、どうすればその虫に立ち向かい、退治することができるかを考える。こうした外在化をすると、本人は自分を責めることがなくなり、問題に対する解決法を明るく冷静に考えることができるようになる。

こうした「問題の外在化」は、自分にとって嫌なものや違和感のある問題に適用される。本人が心から止めたいと思っても止められないもの、やりたくないがやってしまうこと、どうにかしたいがどうにもできないことに適用すると効果的である。問題の外在化は、あまり深刻にならず、ユーモアをもって明るい雰囲気が進めた方がうまくいく。

解決志向の道徳授業に取り入れた例として、小学校2年生向けの教材「なまけ忍者」がある。主人公が宿題をしようとする、なまけ忍者が現れて、「面白いテレビがあるので、後でしょう」とそそのかす。掃除をしようとする、なまけ忍者が現れて、「すぐ汚れるから、しなくていいよ」と言ってくる。主人公はなまけ忍者の言いなりになるが、本当にそれでいいのか途方に暮れるという話である。ここに出てくる「なまけ忍者」こそ、主人公の道徳的課題である「怠け心」を擬人化し外在化したものである。本来であれば、怠け癖のある主人公が自分自身を批判すべきところだが、その怠け心を外在化して「なまけ忍者」と見なすことで客観化し、「このままではいけない」「何とかしたい」と考えることで、前向きで積極的な解決策を考えることができるようになる。

(5) 具体的な行為を構想する

短期療法では、実際に機能する目標（ウェルフォームド・ゴール）を作る。解決像を思い描く際には、大きくて抽象的な目標（例えば、「社会正義を実現する」とか「誰にでも寛容になる」など）を設定してしまい、その目標を達成することが難しく、その目標がどれくらい達成できたのかを判断することすら分からないことがある。そこで、できるだけ小さく具体的で実行可能な目標を設定することで、どれだけ達成したかを図れるようにする。子どもたちは、実際に道徳的な目標を達成することができるため、自己肯定感や自己効力感を高めることもできる。

これを解決志向の道徳授業に活用した例として教材「どうしたの？」がある。この教材は、見知らぬ小さな子が道に迷って困っている時に、上級生の子どもがその子に何か声をかけようか迷う話である。問題場面である「見知らぬ子どもが道に迷って困っている」ところで、自分ならどうするかを考える。「見知らぬ小さい子ども」であれば世話をする義務はないが、そこで「自分はどんな人間になりたかったのか」「どうなればよいか」を考え、明確な解決像を思い描く。「自分は親切な人間になりたい」「困っている人がいたら助けてい」という気持ちがあることも確認する。それではこの場面ではどんなことができるかを考えると、①声をかける、②交番に連れていく、③行きたい所に連れて行ってあげる、など具体的な行動目標をいろいろ考えることができる。

このように解決志向の道徳授業では、「ゴールは子どもの中にあるものであり、外から与えられるものではない」と考える。それゆえ「教師の役割はゴールを与えるのではなく、子ども本人の中にあるゴールを引き出すことである」と言える。子どもは解決像から自分なりの具体的な目標を設定することができる。

また、こうした解決志向の道徳授業では、目標を小さなものにし、具体的な行動として表現する。また、目標は否定形ではなく、肯定形で表現できる行動にする。例えば、「友達と争わない」ではなく「友達と協力しよう」と設定するし、「ルールを破らない」ではなく、「ルールを尊重する」と設定する。

さらに、解決志向の道徳授業では、ミラクル・クエスチョンを使うこともある。このミラクル・クエスチ

ョンとは、「もし(奇跡が起きて)問題が解決したら、どうなっているか」を想像するものである。一般に、困難な問題はとて解決などできないと思えてくるのだが、もし奇跡が起きて解決できたと想定して、その未来をありありと想像できるようになると、肯定的な見方・考え方ができるようになる。

その他に、具体的な行動課題を設定してみるのもよい。例えば、「友達に一日に一度は親切にしてみる」と設定して実践する。こうした具体的な行為は数値で評価することもできるため、スケーリング・クエスチョンを活用することもできる。10点満点で、自分は現時点で何点かを考える。さらに、1点増やすためにどうすればよいかを考え、スモール・ステップで少しでも前進することを目指す。こうして出来ることが段階的に少しでも増えていくと自信を高め、前向きに取り組もうとする態度を養うことができるようになる。

おわりに

本稿では、解決志向の道徳授業を理論的に構築し、具体的な指導法や展開例と共に提示した。特に、認知行動療法や短期療法の理論やスキルを有効活用することで、道徳的な問題と解決の論理的関連性を捉え直し、未来の可能性を広げたり潜在的な資質・能力を育成したりするに注目した道徳授業を開発した。

認知行動療法を生かした解決志向の道徳授業では、道徳的問題の解決にストレートに取り組むことができるため、従来の「問題志向の道徳授業」のように過去の経験や情実にとらわれて、問題の発見や分析に拘泥することはない。また、こうした解決志向の道徳授業は、問題解決を5段階(①問題を定義する、②目標を設定する、③解決策を創出する、④意思を決定する、⑤解決策を実行し評価する)に分けることで、合理的かつ効果的に指導することができる。そのため、子どもたちが実際の道徳的問題にも適切に対応できる資質・能力を着実に養うことができる。

また、短期療法を生かした解決志向の道徳授業では、子どもたちのリソースやストレングスを活用し、例外的にうまくいっている所を探したり、ミラクル・クエスチョンやスモール・ステップを用いたりすることで、前向きな態度を養い、積極的な行動を促すことができる。こうした道徳授業は、子どもたちの未来の可能性をポジティブに捉え直すと共に、現実の生活経験においても生きて働く道徳性を育成することに繋がるだろう。

ただし、こうした解決志向の道徳授業は、まだ開発・実践・検証の過程にある。それゆえ今後の課題としては、解決志向の道徳授業の具体的な事例や指導案を増やしていくことで拡張を図ることである。また、この解決志向のアプローチは、道徳科の授業に限らず、既に各教科や生徒指導、教育相談、学級経営などにも取り入れられ、相互に関連付けることも可能である。今後、教科・領域横断的で全行的な取り組みをして、子どもたちのよりよく生きる力を育成する指導法として洗練していきたい。

(註)

- (1) 拙著『子どもが考え、議論する問題解決型の道徳授業(小学校・中学校)』、図書文化社、2016年。
- (2) ピーター・ディヤング、インスー・キム・バーグ『解決のための面接技法』、金剛出版、1998年。トーマス・J・ズリラ著、丸山晋監訳『問題解療法』、金剛出版、1995年。
- (3) 拙稿「真心で判断する道徳授業の開発—道徳科の問題解決的な学習の改良に向けて—」、『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第70巻2号、2021年。
- (4) 認知行動療法に関する問題解決の5段階については以下の文献を参考にした。平井啓、本岡寛子『ワークシートで学ぶ問題解決療法』、ちとせプレス、2020年、26頁参照。
- (5) SMART目標に関しては、拙著『学びと生き方を統合するSociety5.0の教育』(図書文化社、2020年、137-139頁)を参照。
- (6) 短期療法(ブリーフセラピー)に関しては、以下の文献を参照した。森俊夫・黒沢幸子『<森・黒沢のワークショップで学ぶ>解決志向ブリーフセラピー』、2002年。黒沢幸子編著『ワークシートでブリーフセラピー』、ほんの森出版、2012年。森俊夫『ブリーフセラピーの極意』、ほんの森出版、2015年。